

弥生時代の集落

日本史 アツプデート

- ・見晴らしの良い山頂や高地に築かれた弥生時代の「高地性集落」は、軍事的な性格が強調されてきた。近年は、成立の背景に交易や海上交通を挙げる見方も提示されている。
- ・高地性集落が盛んに造営された地域は時期によって、瀬戸内、近畿、北陸と変遷する。変遷の理由を研究することで、集落形成の謎に迫

ここに注目!

れる可能性がある。
 ・国指定史跡の環濠集落「池上曾根遺跡」(大阪府和泉市、泉大津市)で出土した大型掘立柱建物の柱材は、近年の再調査で、最も新しいものと古いもので700年以上も年代差があった。時代が大きく離れた木材を一つの建物に使った弥生人の行動について、様々な説が提示されている。

交易の拠点、交通路上に

愛媛大の柴田昌児教授

弥生時代の集落には、山など標高の高い場所に営まれた「高地性集落」や、堀や木の柵に囲まれた「環濠集落」がある。こうした集落をめぐって近年、定説や常識を見直す研究や発見が相次いで報告され、当時の社会の実態や人々の暮らしが浮かび上がりつつある。

高地性集落は弥生時代中後期に、西日本を中心に営まれた。従来は防御施設と考えられ、軍事的な性格が注目されてきた。だが、最近の研究では、ほかに目的があった可能性が提示されている。

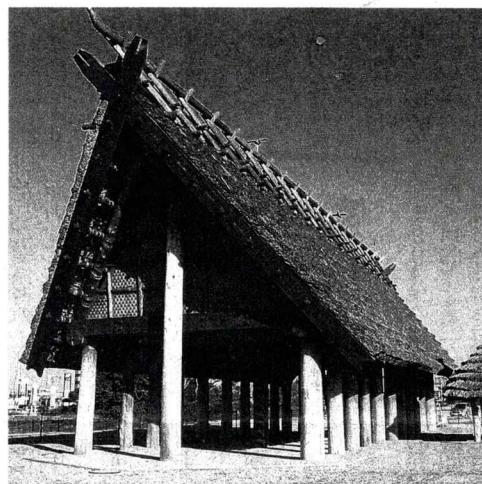
そうした研究の一つが、交易の拠点となる交通路上に築かれたとする説だ。弥生中期の高地性集落として知られる国指定史跡の「紫雲山遺跡」(香川県三豊市)は、標高352.2メートルの山頂にある。2012年度から行われた発掘調査で、瀬戸内海地域各地の土器が見つかった。物資が集まる広域的な拠点だったことが注目されている。

理由を明らかにすること

は、同遺跡が海上交通におけるランドマーク(目印)だったと指摘する。現地で行った実験で、遺跡から遠方の船は視認しづらく、海上を広域に監視することは難しいことが分かった一方、海上からは遺跡が見やすいことが確認できた。古代から、船は山や岬を目印にして岸を伝って移動したといひ、柴田教授は「当時、海上交通が活発化し、人々が頻りに往来したことを示している」とみる。

高地性集落が営まれた理由を巡ってはほかに、木材や動物の調達など生業のため▽気候変動で多雨となり低地に住めなくなったため▽祭祀を営む場だったなど、様々な説が提示されている。

時期によって営まれた地域が変遷するものも高地性集落の特徴だ。瀬戸内では弥生時代の中期から後期初め、近畿では後期前半から後期半ば、北陸では後期から古墳時代初頭にかけて盛んに築かれた。それ以降は姿を消してしまう。変遷の理由を明らかにすること



池上曾根遺跡で復元された大型掘立柱建物—和泉市教育委員会提供

が、高地性集落の謎を解く鍵の一つになりそうだ。

弥生時代を代表する環濠集落の一つ「池上曾根遺跡」では、当時の人々が巨木をどう使用したかをめぐる新事実が判明した。

1995年の発掘で出土した大型掘立柱建物の柱根のうち一本は、当時年輪年代法による調査で、紀元前52年に伐採されたものと分かった。建物もこの時期に建てられたと考えられていた。

年輪年代法は、樹木の年輪の幅が年ごとの気象条件によ

って異なることを利用し、遺跡や古社寺の木材の年輪幅から、伐採年を割り出す手法だ。伐採年がそれに近い年代を知るには、樹皮が幹の外側の材が必要だが、ほかに調査した4本はそうした部分が失われ、おまかに紀元前100年代の伐採とされた。

5本の柱根は近年、精度が向上した年輪年代法で再調査された。すると、最も残りが良かった前52年の柱根の年代はそのままで、ほかの4本は前782年、前221年との結果が出た。一つの建物の部材に、約7

00年もの年代差があることに驚きの声があがった。年代差の理由について、国立歴史民俗博物館の箱崎真隆准教授は、「先の時代の建造物から転用した▽いづれの部材も同年代の巨木を使用したが、何本かは幹の外側を削り取り、年輪年代法では古い年代と判定された▽火山噴火や地すべり、津波で地中に埋もれた木々が数百年後に地表に露出し、建材として使われた」などの可能性を挙げ

奈良県立橿原考古学研究所の森岡秀人共同研究員は「あくまで仮説」とした上で、「伐採した針葉樹の巨木が長年にわたってご神木のようにあがめられ、地域統合の象徴である集落の大型施設建築にあたり、それが集められたのではないかと推察する。

森岡さんは「弥生時代の遺跡の研究が進み、少し前まで常識だったことが多々覆っている。まだ確定していない説もあるが、議論自体に意義がある」と話している。(夏井崇裕)